

記念日とは、誕生日とは

記念日とは

八月はいつも厳粛に過ごしたい月である。六日、九日、十五日は日本人にとっては忘れてはならない特別な日である。80年も経過すると世代交代があり体験した人が少なくなる、100年もすると教科書に残される位の記憶になってしまうかも知れない。過ぎ去ってしまえば新しさを失う時間をクロノスというのに対して過ぎ去っても古くならない意味を持つ時間をカイロスという。カイロスは各個人によって異なるから主観的な時間であるが、主観的でないカイロス時間がある。客観的に普遍的に忘れられない時間が記念日である。

八月はそんな時間が多い。日本人が原爆と戦争を考える月である。沈思黙考し何かを決断し始める時である。日本人ならば敗戦の歴史を反省し同じ罪の繰り返しをしない決断を実行する日が記念日ということになる。敗戦の歴史を考えると、戦争を開始した者の責任、終戦の決断を遅らせた人の責任、原爆を投下した人の責任を思い起こすべきであろう。

特に今年はパリ・オリンピックの開催時期と重なり国民の熱狂は金メダルに湧いている。そんな中でも広島、長崎では原爆犠牲者慰霊祭が行われ総理大臣も出席している。広島では1995年（平成7年）から毎年子供代表の平和の誓いがなされている。式典で一番心に響くメッセージである。政治家の虚飾に満ちたどす黒いメッセージとは異なるのはなぜだろうか。マスコミの報道は政治家ベースである。だから特別の日の式典が形骸化され開けば民衆は国家に文句を言わないだろうという姿勢で時の流れを待っている。

国民の平和への期待や希望を聞いているふりをして、同調するかのような与えられたメッセージを読み上げて終わる。そんな虚しい繰り返しにも関わらず小学生たちは訴え続けている。そのメッセージを今年も掲載する。又、今年は1995年第1回目の子ども平和宣言も掲載して子どもたちの変わらない純粋な訴えに耳を傾けたい。第1回目の子供宣言を感動して聞き入ったあの日は忘れられない日となった。

今年は広島県知事のメッセージがユニークであった。聞くに値するものと判断し、またあまりマスコミに取り上げられないので、ここに掲載して一人でも多くの人に現地の人の思いに寄り添いたいと思う。いずれも文末に掲載します。

誕生日とは

八月は敗戦を想うときであるが、その真ん中に私の誕生日がある。83歳になる私は戦争の記憶があまりない。ただ、この期間に誕生日の「おめでとう」と祝されるのがなんとなく気が重い。考えるまでもなく、戦争と私の誕生日にはなんの関係もない。しかし、誕生日を挟んで原爆の投下と敗戦があることで毎年この歴史的事実から目を逸らすことができなかった。無名の個人の力ではどうすることもできないことは分かっているが、それでも何かを主張し、何らかの行動を起こしたのは何故なのだろうか。忘れかかっている事実を語り続けること、知られていない事実を掘り起こすことは意味があると思う。

今年NHKの番組で「一万人の被爆者が運ばれた島・似島」を見て一冊の本を買った。

「凍りついた夏の記憶」という本である。来月号に紹介したいと考えている。

さて、この誕生日を前に7年ぶりにエンディング・ノートの書き換えをした。きっかけはやはり先月の親友の死であった。終末を共にした人は数人いるが、今回ほど自分自身に迫ってきた思いはなかった。ただ粛々と葬儀式を進めていただけではなく、自分の準備が中途半端であることに気づいた。私の場合相続で困ることは何もない。相続人は最も単純だし相続財産に課税されることもない。必要なことは詳細な葬儀式のことへの配慮が欠けていたことに気づいた。終末医療も併せて家族と話し合いながら八月末までに完了しようと思っている。煩雑なのは死亡後のカードの解約、ドコモの手続きだと報道で知った。どう対策するか思案中である。

それにしても、長く生かして頂いたと思う。今はこれ以上幸いはない日々を頂いている。この誕生日を起して始めることがある。「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の2回目の写書を若干の編集を入れて3年がかりで完成させようと計画している。ある人は言う「3年先は分からない」と。そう、私もそう思う。古の詩人も次のように謳っている

「残りの日々を数えるすべを教え、知恵ある心を私たちに与えてください。⑫」

「朝には、あなたの慈しみに満たされ、すべての日々を楽しみ、喜ぶことができますように。⑭」

「私たちの手の働きを力あるものにしてください。⑰」（詩編90篇。聖書協会共同訳）

私は完成できると信じている。毎月の完成が喜びとなり、その喜びが螺旋状に天に近づいていく、なんと美しいことであろうか。真に、まことに幸いな時が与えられている。

老いゆけよ、我と共に！ 最善はこれからだ。

人生の最後、そのために最初も造られたのだから。

我らの時は、聖手の中にあり、神言いたもう『すべてはわたしが計画した。

青年はただ、その半ばを示すのみ。

神に委ねよ。全てを見よ。しかして恐るな！』と。（ロバート・ブラウニング作）

誕生日とは一念発起する時だと考えると楽しみが増える。

以下は3つの資料です

- | | |
|-------------------|---------------------|
| (1)平和への誓い（小学生による） | 2024年8月6日 |
| (2)平和への誓い（小学生による） | 1995年8月6日 |
| (3)湯崎英彦広島県知事挨拶 | 2024年8月6日行われた平和記念式典 |

(1)平和への誓い・2024年8月6日

目を閉じて想像してください。

緑豊かで美しいまち。人でにぎわう商店街。まちにあふれるたくさんの笑顔。

79年前の広島には、今と変わらない色鮮やかな日常がありました。

昭和20年(1945年)8月6日 午前8時15分。

「ドーン!」という鼓膜が破れるほどの大きな音。

立ち昇る黒味がかかった朱色の雲。

人も草木も焼かれ、助けを求める声と絶望の涙で、まちは埋め尽くされました。

ある被爆者は言います。あの時の広島は「地獄」だったと。

原子爆弾は、色鮮やかな日常を奪い、広島を灰色の世界へと変えてしまったのです。

被爆者である私の曾祖母は、当時の様子を語ろうとはしませんでした。

言葉にすることさえつらく悲しい記憶は、79年経った今でも多くの被爆者を苦しめ続けています。

今もなお、世界では戦争が続いています。

79年前と同じように、生きたくても生きることができなかつた人たち、

明日を共に過ごすはずだった人を失った人たちが、この世界のどこかにいるのです。

本当にこのままでよいのでしょうか。

願うだけでは、平和はおとずれません。

色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。

一人一人が相手の話をよく聞くこと。

「違い」を「良さ」と捉え、自分の考えを見直すこと。

仲間と協力し、一つのことを成し遂げること。

私たちにもできる平和への一歩です。

さあ、ヒロシマを共に学び、感じましょう。

平和記念資料館を見学し、被爆者の言葉に触れてください。

そして、家族や友達と平和の尊さや命の重みについて語り合しましょう。

世界を変える平和への一歩を今、踏み出します。

令和6年(2024年)8月6日

こども代表

広島市立祇園小学校6年

加藤 晶

広島市立八幡東小学校 6年

石丸優斗

(1)平和への誓い・1995年8月6日

広島に原子爆弾が投下されて五十年、その大きな節目の年に、私たちは、世界の都市から、この被爆した街、広島で開かれている「こども平和のつどい」に参加し、多くのことを学びました。

あの日、一瞬にして亡くなった人たち、救いを求め、苦しみながら亡くなった人たち。その姿を思うと、核兵器や戦争の恐ろしさ、残酷さに、二度と広島悲劇を繰り返してはならないという気持ちが強く胸にせまってきました。

現在、地球上のある地域では、戦争や飢餓などのために、たくさんの人たちが亡くなったり、傷ついたりしています。また、地球環境の破壊による被害もたくさん出ています。私たちは、世界のすべての人たちが平和で安心して暮らせるよう今何をしなければならないか、また何ができるかについて考えてきました。

その中で、平和を築くためには、身近な友達への思いやりや優しさを持つことが大切であり、さらに世界の人たちと仲良くし、もっと力を合わせていかなければならないことを学びました。

そのため、言葉や考え方の違いをこえ、お互いの立場を理解し合い、尊重し合うことの大切さについて気づくことができました。

無限に広がる宇宙。その中に美しく青く光り輝く私たちの地球。このかけがえのない地球の未来のために、私たちは「こども平和のつどい」で知り合ったすばらしい仲間とともに、広島で学んだことを語り継ぎ、新たな地球平和をめざして努力していくことを誓います。

平成7年(1995年) 8月6日

子ども代表

広島市立志屋小学校6年 久保 美幸

広島市立草津小学校6年 山口 賢二

(3)湯崎英彦広島県知事挨拶

2024年8月6日行われた平和記念式典

79回目の8月6日を迎えるにあたり、原爆犠牲者の御霊(みたま)に、広島県民を代表して謹んで哀悼の誠(まこと)を捧げます。そして、今なお、後遺症で苦しんでおられる被爆者や御遺族の方々に、心からお見舞いを申し上げます。

原爆投下というこの世に比類無い凄惨な歴史的事実が、私たちの心を深く突き刺すのは、「誰にも二度と同じ苦しみを味わってほしくない」という強い思いにかられた被爆者が、思い出したくもない地獄について紡ぎ出す言葉があるからです。その被爆者を、79年を経た今、私たちはお一人、お一人と失っていき、その最後の言葉を次世代につなげるべく様々な取組を行っています。

先般、私は、数多の弥生人の遺骨が発掘されている鳥取県青谷上寺地遺跡を訪問する機会を得ました。そこでは、頭蓋骨や腰骨に突き刺さった矢尻など、当時の争いの生々しさを物語る多くの殺傷痕を目の当たりにし、必ずしも平穏ではなかった当時の暮らしに思いを巡らせました。

翻って現在も、世界中で戦争は続いています。強い者が勝つ。弱い者は踏みにじられる。現代では、矢尻や刀ではなく、男も女も子供も老人も銃弾で撃ち抜かれ、あるいはミサイルで粉々にされる。国連が作ってきた世界の秩序の守護者たるべき大国が、公然と国際法違反の侵攻や力による現状変更を試みる。それが弥生の過去から続いている現実です。

いわゆる現実主義者は、だからこそ、力には力を、と言う。核兵器には、核兵器を。
しかし、そこでは、もう一つの現実は無視されています。人類が発明してかつて使われなかった兵器はない。禁止された化学兵器も引き続き使われている。核兵器も、それが存在する限り必ずいつか再び使われることになるでしょう。

私たちは、真の現実主義者にならなければなりません。核廃絶は遠くに掲げる理想ではないのです。今、必死に取り組まなければならない、人類存続に関わる差し迫った現実の問題です。にもかかわらず、核廃絶に向けた取組には、知的、人的、財政的資源など、あらゆる資源の投下が不十分です。片や、核兵器維持増強や戦略構築のために、昨年だけでも14兆円を超える資金が投資され、何万人ものコンサルタントや軍・行政関係者、また、科学者と技術者が投入されています。

現実を直視することのできる世界の皆さん、私たちが行うべきことは、核兵器廃絶を本当に実現するため、資源を思い切って投入することです。想像してください。核兵器維持増強の十分の一の1.4兆円や数千人の専門家を投入すれば、核廃絶も具体的に大きく前進するでしょう。

ある沖縄の研究者が、不注意で指の形が変わるほどの水ぶくれの火傷を負い、のたうちまわるような痛みを苦しみながら、放射線を浴びた人などの深い痛みを、自分の痛みと重ね合わせて本当に想像できていたか、と述べていました。誰だか分からないほど顔が火ぶくれしたり、目玉や腸が飛び出したままさまよったりした被爆者の痛みを、私たちは本当に自分の指のひどい火傷と重ね合わせることができているのでしょうか。人類が核兵器の存在を漫然と黙認したまま。この痛みや苦しみを私たちに伝えようとしてきた被爆者を一人、また一人と失っていくことに私は耐えられません。

「過ちは繰り返しませぬから」という誓いを、私たちは今一度思い起こすべきではないでしょうか。

令和6年8月6日

広島県知事 湯崎 英彦

知事の提案を推挙する人々が声を上げなければならない。広島にはその使命と責任があると思う。文中アンダーライン、文字体の変更は小原が同意して引きました。

パリ通信・第152号

シラクーサからメッシーナへ

続・カラヴァッジョ

連日40°Cを超える灼熱のシラクーサから電車でメッシーナに向かった。シラクーサ始発ローマ行き各駅停車の長距離電車である。

ローマまで11時間、シラクーサ・メッシーナ間は約3時間。海岸線を速度50~70kmで走るので窓の景色も充分楽しめる。冷房も効いている。日本もフランスもTGVや新幹線ができて消えてしまったが、のんびりと安い料金の

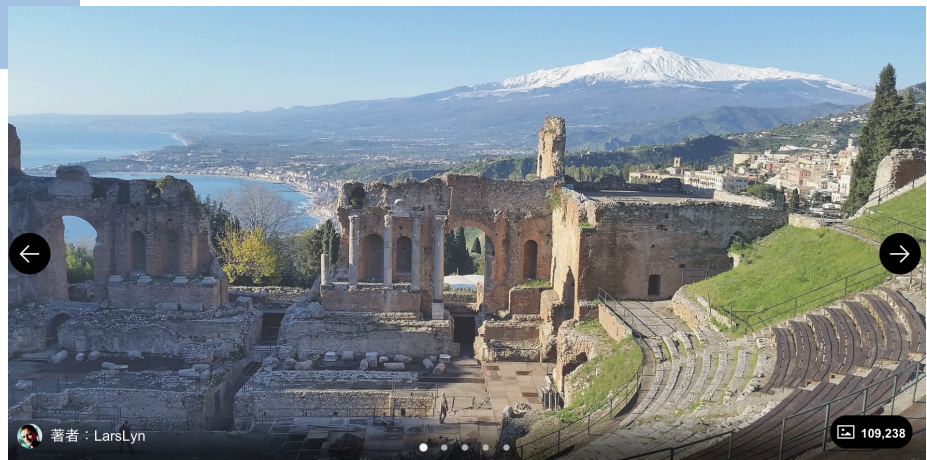
長距離電車の旅は風情があって悪くない

と思った。シラクーサを出てカタニアが近くなると右手に真っ青な海と空、左手に標高3357mエトナ山の裾野が広がる。タオルミーナの湾にはパラソルを広げて海水浴を楽しんでいる人が見える。どんな小さな入江も水が澄んで家々には実を付けたオリーブの木、ブーガンビ



リエの赤い花、大きなサボテンが植えてあり美しい風景に見惚れている間に目的地メッシーナに到着した。

(ここまでの3枚の写真は編者が集めたもの)



メッシーナはシラクーサより大きな街だ。シラクーサの人口は13万でメッシーナは23万を超える。メッシーナ海峡を渡る大型フェリー、大型クルーズ船が港に横付けていた。シシリアに着いて以来空に雲が出ることはなく、湖が干上がってしまう程雨も降っておらず、メッシーナ市全域が水不足で、B&B（ホテルの名前）の方から水を大切に使うって下さいねと言われた。

メッシーナもシラクーサと変わらぬ青空で40°Cを超え

る暑さだった。

朝食からグラニータ(かき氷シェイク)とブリオッシュが出た。シシリア名産のレモンとピスタチオ味は特に美味しく、一日に何度もカフェで涼んでは食べた。



そして念願のメッシーナ美術館カラヴァッジョ「羊飼いの礼賛」(1609)を見に行った。

B&Bからメッシーナ美術館までは1番のバスで20分。海が見える高いところにあり、所蔵品の数は少ない。

カラヴァッジョとアントネーラ・ダ・メッシーナ(1430頃-1479)が代表所蔵作品である。アントネーラ・ダ・メッシーナは名前の通りメッシーナ生まれでシシリアだけでなく、ヴェネツィアやローマなどでイタリア全土で広く活躍し、早くからフランドル絵画



アントネーラ・ダ・メッシーナ「受胎告知」(1474)



を知っていたルネサンス期の油絵先駆者である。シラクーサとメッシーナに1点ずつ「受胎告知」が残っている。

カラヴァッジョの部屋には1609年作「羊飼いの礼賛」と「ラザロの復活」がある。照明を抑えた暗い部屋には二つのソファが置いてある。メッシーナにいる間毎日9時開館とともにソファに座って1時間近く過ごした。警備の人に昨日も来ましたねと言われた。

「羊飼いの礼賛」はカラヴァッジョの中で一番好きな作品である。シラクーサで二ヶ月

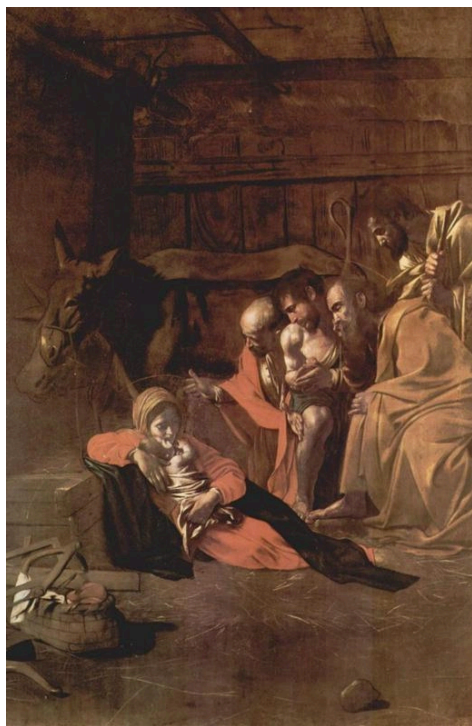
足らずで仕上げた「聖ルチアの埋葬」、次に描いたのがメッシーナの「羊飼いの礼賛」だ。この作品も人物の頭を結ぶ対角線を境に上部は暗い。福音書の記述通り牛とロバがい

る厩でキリストが誕生している。誕生したキリストは地面に置いたり、籠に入れたりとしてマリアから離されて描くのが一般的だが、カラヴァッジョの作品はマリアの両手に優しく大切に抱かれた図だ。マリアは紺藍色のマントの上に座りキリストの死を予告する血の色である赤い服を着ている。母親の目を追う幼子イエスを抱くマリアの姿は、貧しい土地シシリアで描かれた母親の至上の愛である。マリアの近くにはパンを入れた籠と大工道具が置かれ、ナザレのイエスとして家を建て働くことを告げている。そして画面の右下、藁が疎らな地面に一つの石が描かれている。見逃すことが多いですがとても大切な石ですよと美術館の方に教えていただいた。

「家を建てる者の捨てた石、これが隅（すみ）の親石となった」（詩編118:22からの引用）。自分自身はまもなく人々に捨てられる。しかし、神はその命(その死)を新しい建物の親石とする。「一粒の麦もし死なずば」と同じ意味を秘めた石である**

カラヴァッジョ・シシリア時代の作品はだんだんと死に近づいていく一人の個人の運命を予告しているかのように見える。今から415年前に描かれたにもかかわらず、現代の私たちに多くのことを語りかけてくる作品である。

(古賀順子記)



**解説

←左の写真は模写です。本文中の写真は古賀さんのカメラで撮ったものを縮小してあるため、大工道具（絵画の左下）と石（絵画の右下）がよくわかるように模写を探した。

「一粒の麦は地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」（ヨハネによる福音書12章24）

画面右下の一つの石が「同じ意味を秘めた石」であるとは隅の親石と一粒の麦はいずれもキリストの十字架の贖罪死を意味することである。それらは新約聖書の奥義であると同時に福音の真理を表す象徴言語である。そこにカラヴァッジョがどれほど深く悔い改め、キリストに救いを求めたかを読み取ることができると編者は思う。

小原靖夫記

